

平成 22年 3月 25日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19720093

研究課題名 (和文) ウォライタ語 (エチオピア) 及びその周辺言語の記述的研究

研究課題名 (英文) Descriptive studies of Wolaytta (Ethiopia) and its surrounding languages

研究代表者

若狭 基道 (WAKASA MOTOMICHI)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号：30436670

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、言語学

キーワード：エチオピア、ウォライタ語、カンバタ語、アフロアジア諸語

## 1. 研究計画の概要

(1) フィールドワークに基づき、エチオピアで話されているウォライタ語を記述する。文法の詳細な観察・記述と、語彙の全体的な把握を特に重視する。

(2) ウォライタ語の周辺で話されている言語の基礎的な資料を集め、ウォライタ語と比較・対照する。

## 2. 研究の進捗状況

(1) 実際にウォライタ語が話されている地域でフィールドワークを計3回行った。引用構文を中心に、相手に作文をして貰ったり、こちらの作文を判定して貰ったりしてデータを集めた。直接話法とも間接話法とも呼び難い独自の話法の規則があり、ウォライタ語の「節」を考える上でも重要な問題であることが判明し、現在論文を執筆中である。その他、ポップス音楽や謎々等の口承文芸を含め、文化を研究する上で価値があると思われるテキストを採集・分析した。ウォライタ語で利用されている言語の詩的機能を考察するのに重要な資料を集めつつある。その過程で、多くの語彙が収集出来た。ウォライタ語の語彙の豊富さを改めて確認した。その語彙の全体像を探るべく、既成の辞書を元に、派生語や細かいニュアンスを確認していく作業も行った。

(2) ウォライタ語地域でカンバタ語話者を見付け、調査票に基づいて基礎語彙調査を行い2000語弱採集した。ウォライタ語と類似した語が幾つも見付き、両言語の関係の考察を始めた所である。同様に基礎文法調査も7割方終えることが出来た。名詞が多くのクラスに分かれること、トーンが文法的な機能

を果たすこと、動詞の活用に於ける音韻形態論、等が明らかになった。

## 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

慾を言えば限が無い。フィールドワークにかけられる時間が多ければ多い程、(2)は成果が得られるものであるし、カンバタ語は予想以上に文法が手強かったのもう少し調査時間が欲しかった。また、(1)はかなりレベルの高い込み入った調査をしているので、時間に比例して成果が得られるとは限らない。もう少し才能と運に恵まれていればと思わないでもない。だが、可能な時間は十分に活かすことが出来た。その成果を本格的にまとめるのはこれからであるが、質・量ともに当初期待していた資料が着実に得られつつある。

## 4. 今後の研究の推進方策

今までと同様に、フィールドワークを着実にやっていく。可能ならばカンバタ語が話されている地域でも調査を行う。

実りの多い調査にするためにも、日本でしっかりと今までの資料の整理と準備を行うつもりである。

## 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計3件)

(1) 若狭基道、「ウォライタ語の関係節」、日本ナイル・エチオピア学会、平成 21 年 4 月 26 日、総合地球環境学研究所

(2) 若狭基道、「ウォライタ語の「再帰代名詞」」、日本アフリカ学会、平成 20 年 5 月 24 日、龍谷大学

(3) 若狭基道、「ウォライタ語の引用文と人称代名詞」、日本アフリカ学会、平成 19 年 5 月 26 日、長崎ブリックホール

〔その他〕

(1) 若狭基道、「数百万人のマイノリティーウォライタ（エチオピア）の場合―」、砂野稔幸・梶茂樹（編著）『アフリカのことばと社会 多言語状況を生きるということ』、p281-p308、三元社、所収